

氏名	横 山 正 智
学 位 の 種 類	博 士 ( 経 済 学 )
学 位 記 番 号	第 3898 号
学位授与年月日	平成13年 3 月23日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当者
学 位 論 文 名	日本の工業化とガデリウス商会 ―商社からメーカーへ―
論文審査委員	主 査 教 授 大島真理夫      副主査 教 授 坂上 茂樹 副主査 助教授 長谷川淳一

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、1907年に日本で事業を開始した、スウェーデン系の機械輸入商社ガデリウス商会が、多くの外資系商社が比較的短期間で生命を終わっているなかで長期にわたって存続し、戦後の高度成長期には本格的メーカーへと転換して大きく発展するに至った過程を、企業史的に明らかにした論文である。400字詰、約850枚の大作である。

ガデリウス商会の創始者クヌート・ガデリウスは、スウェーデン政府の命を受けた東南アジア、中国などの市場調査の後、日本への進出を決意し、1907年11月、横浜に事務所を開いた。初期の売り上げに貢献した製品は、ボリンダー社の漁船用エンジン、ルックス社の灯台用石油白熱灯器、鉱山採掘用のダイヤモンド試錐機などであった。ダイヤモンド試錐機は東海道線の丹那トンネル工事で活躍した。そして、その工事報告書に「この機械の納入会社から、スウェーデン人のエキスパートを頼んで指導してもらおう」という記事が出ている。同試錐機は関門トンネルの掘削でも活躍している。続いて、昭和初期の不況期から戦時体制に至る時期では、アガ式灯台灯器（アセチレンガス使用）、蒸気アキュームレータ、ボイラーの空気予熱機、バルブ製造薬液循環装置、高品質鉄素材などであった。これらに共通する特徴は、スウェーデンの独自かつ高度な技術をふまえた製品・機械であったこと、日本側では政府関係の需要、戦略的部門で需要される機械であったことである。取扱商品のこうした特徴が、ガデリウス商会に安定した利益をもたらし、戦時の経済統制が進んで民需が制限されるようになってからも需要を継続させた。スウェーデンが中立国であったという事情も、戦争末期まで業務を継続できた要因である。

戦後の復興期が終わり、高度経済成長期にはいと、電力需要の急増に伴い、発電用ボイラーの空気予熱機が主力商品となり、会社の急成長に貢献するようになった。そして、発電規模の増大に伴う機械の大型化という背景のなかで、直接的には通産省の行政指導を引き金として、ガデリウス商会は輸入商社から本格的メーカーへと転換した。

論文の第2部は、会社の内部資料を駆使して、空気予熱機のライセンス生産を行うに至る事情、複雑な交渉過程を明らかにした。発端は、1964年に建設された新鋭大型の関西電力姫路第2発電所第4号発電機の受注をめぐるプロセスである。関西電力はこの発電機を米国ウェスチングハウス社から輸入する予定で外貨申請をしたのであるが、通産省は発電機一式の中に含まれていた空気予熱機の国産を指示した。その分の外貨を節約する目的である。しかし、ガデリウス商会は米国の進んだ技術のライセンスは取得しておらず、この指示をきっかけとして、本来のスウェーデンのライセンシーから米国の空気予熱機メーカーのライセンシーに移行し、本格的メーカーへの道を歩むことになったのであるが、交渉の過程は、さまざまな主体の利害が入り組んで、きわめて複雑であった。

空気予熱機の本格的メーカーとして生産を開始したことは、高度成長期の旺盛な電力需要を受けて、ガ

デリウス商会を急速に成長させた。しかし、本格的メーカー化に伴う固定設備への投資の必要、建設に長期間を要する大型機械の受注に伴う運転資金の必要は、売り上げの急増にもかかわらず会社の財務状況を悪化させた。創立以来、ガデリウス一族の同族会社であったという会社の所有形態が、日本での株式上場によって資金調達を円滑化させるという道をとることを妨げた。結局、石油危機を引き金として、スウェーデン資本に会社を売却することになったのである。企業として成功が、会社の所有形態と矛盾し、ガデリウス一族が会社を売却せざるを得なかったという逆説的な結果となったのである。会社の売却は、社内の風土を一変させた。1990年代に入り、所有形態はめまぐるしく変遷し、ガデリウス商会が行ってきた業務は、現在は、フランスやスイスのグローバル企業に分散されて行われている。

## 論文審査の結果の要旨

本論文の学術的価値は、大きく4点あると言える。

第1は、ガデリウス商会というスウェーデン系の機械輸入商社の企業史を、激動の20世紀日本という時代背景の中で描き出したこと、それ自体の価値である。外資系商社の企業史的研究がほとんど進んでいない現状の中で、貴重な事例報告であり、日本の工業化史像をより豊富なものにしたことは間違いない。また、論文第2部は、大量の内部文書（英文）に基いた研究であり、資料的価値も高い。

第2は、戦前・戦後を通じて、20世紀の日本の工業化に、スウェーデンの工業製品や機械が、意外に大きな役割を果たしていたことを示した点である。日本の工業化への技術的影響といえば、イギリス、ドイツ、アメリカといった国との関係がすぐに思い浮かぶが、スウェーデンとの関係はあまり注目されていなかったと思われる。本論文は、ガデリウス商会という輸入商社の企業史を通じて、さまざまな機械・製品が各時期の日本の工業化に果たしていた役割を、浮き彫りにした。スウェーデンが中立国であったということから、第2次世界大戦末期まで輸入が続いていた事実の紹介も興味深い。

第3には、戦後の高度経済成長期における技術導入の過程を、一つの事例を通じてではあるが、「裏面史」まで含めて、具体的に描き出した点である。外貨節約という目的から国産化（技術導入による国内生産）を半ば強制する通産省、メンテナンスの容易性から国産を望む関電（国内メーカー）、契約成立を優先して細部を詰めていない米国ウェスチングハウス社、大企業・親会社の意向に翻弄される日米の中小下請けメーカー（ガデリウス商会とエア・プレヒーター社）、ライセンス獲得をめぐる三菱重工とガデリウスの確執、ロイヤルティー率の決定やリターン・コミッションの存在など内部資料でなければわからない生々しいエピソード、授權区域などのライセンス契約の複雑性など、戦後日本経済史の貴重な事例報告になることは間違いない。

第4には、外資系輸入商社の経営史的研究としての価値である。本国スウェーデンが中立国であったという利点も生かしながら、同国の高度かつ個性的な技術を背景にした機械・製品を次々に紹介・輸入し続けたことによって、極東の日本でサバイバル出来たガデリウス商会が、本格的メーカーに転じ、高度成長の波に乗って企業として急速に成長したにもかかわらず、外国人の同族会社であるということに起因する財務的限界から、会社売却に至るという逆説的な企業史は、経営史研究として貴重な成果である。

以上の理由により、本論文は課程博士の学位の授与に値するものと判断する。